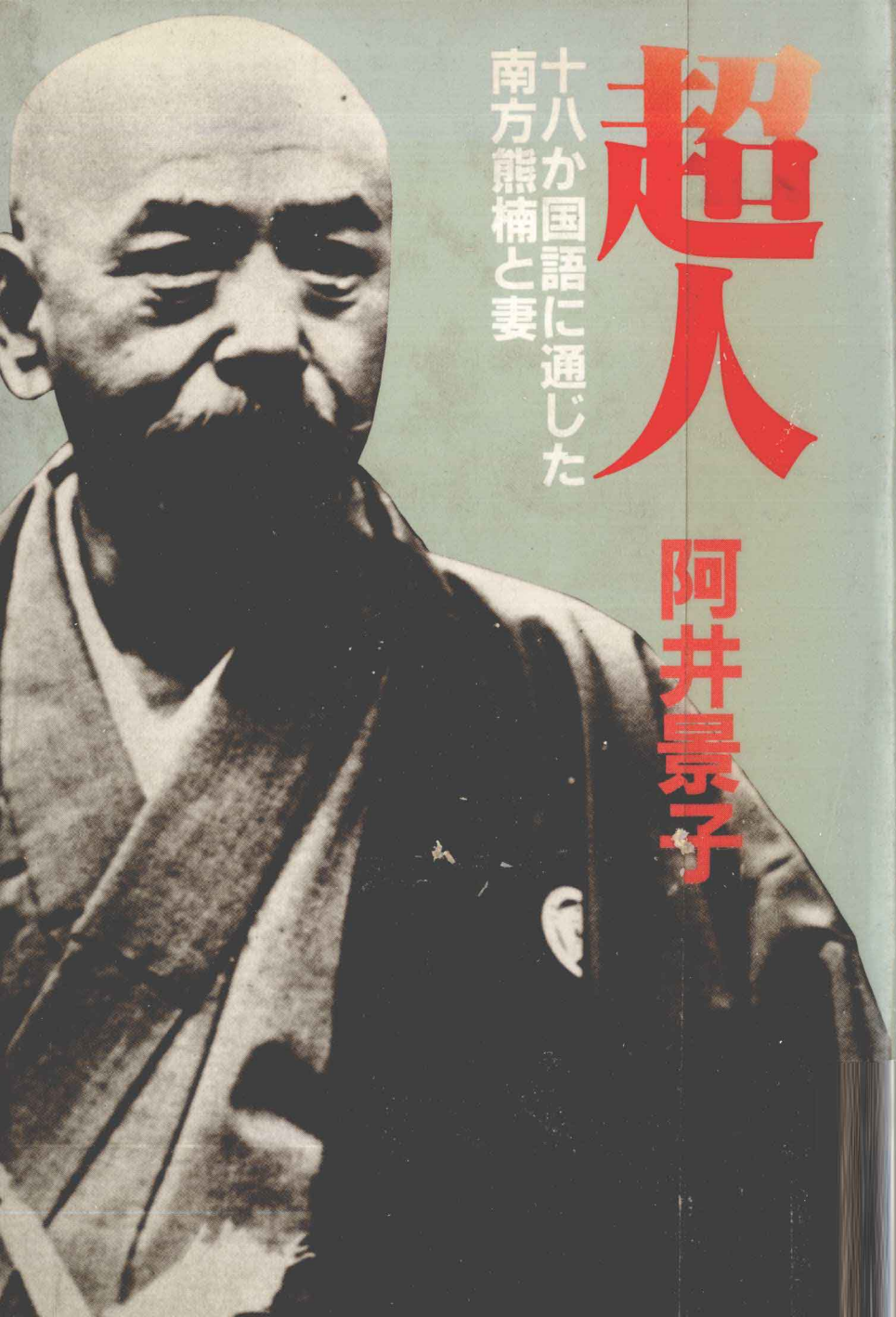


超人

十八か国語に通じた
南方熊楠と妻

阿井景子



十八か国語に通じた
南方熊楠と妻

超人



阿井景子

超人

一九八五年十一月二十七日 第一刷発行

著者——阿井景子

定価——一四〇〇円

装幀——松永 昭

© Keiko Ai 1985. Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号二三

電話 東京三—九零—二二（大代表）

印刷所——日本写真印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

◎落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

目次

第一章	猫	5
第二章	信玄袋	24
第三章	「柳の蔭」	39
第四章	対立	60
第五章	米騒動	87
第六章	骨肉	111
第七章	植物研究所	127
第八章	暗い海	147
第九章	きし女と菊女	161
第十章	妹尾官林	189
第十一章	御進講	204
第十二章	花千日の紅なく	217
あとがき		248

装帧
松永
昭

超

人

十八か国語に通じた南方熊楠と妻

第一章 猫

こよみの上では秋だが、夏が音をたてて燃えている。

表の門口で盆の迎火を焚いた松枝は、庭伝いに裏手の書庫にまわった。夫・南方熊楠が死んで五年の歳月が経過した。

松枝は、閉めきっていた書庫の重い引き戸を押しあける。もと米蔵だったという土蔵の書庫はひんやりと湿ったにおいが鼻をつく。

松枝は開いた戸の傍に佇むと、眼鏡を添え、あたかもそこに夫がいるかの如く促した。

「さあ、おはいりなさいませ」

盆が来る度に松枝は第一に書庫を開き、黄泉の国から帰ってくる夫に、この挨拶を行なう。

世事に疎く、赤児のような夫であつた。

松枝は、ひとときわやかましくなつた蝸の鳴き声をききながら、遠いむかしを手繰つていた。

松枝は明治十二年二月六日、田村宗造、さとの四女として、和歌山県田辺町権現通りに生まれる。

宗造は闘鶏神社（田辺地方の総産土神）の社司で、紀州藩士、漢学者でもあつた。先妻が病死したので、さとを後妻に迎える。さとは先妻の娘二人を育てながら、四人の娘を生んだ。繁恵、松枝、広恵、菊恵である。

闘鶏神社は、熊野の別当湛快が熊野三山の権現をこの地に勧請したことから、権現さんと呼ばれている。

新熊野闘鶏権現ともいわれ、難路を熊野までいけぬ人々は、この社で代拝した。境内には熊野神木の「なぎ」がある。

駅に降りたち、田辺のまちを縦断しようとすると、大社・闘鶏神社の大鳥居が目に入る。社名は、湛快の子湛増が社前の広場で白と赤の鶏を闘わせたことに由来するという。熊



▲御進講記念、南方熊楠と松枝

野別当、田辺社の別当は平氏の恩恵を受けていた。

『平家物語』『源平盛衰記』によれば、湛増は社殿にこもり神楽^{かぐら}を奏し白旗（源氏）につけ、とお告げがあったが、なお決心がつかずに闘鶏を行なう。

その結果、白い鶏が勝ったので源氏に味方し、壇^{だん}の浦の合戦に参加したというのである。宗造は明治六年七月から明治四十年七月まで社司をつとめた。神社から数十メートル手前の権現通りにある家から神社に通った。

「境内にお住まいではなかったのですか」

私の問いに、宗造の孫であり、熊楠、松枝の一人娘でもある南方文枝は、

「当時は、神域をけがすと許されませんでしたから」

と答えた。

それを裏付けるように熊楠は、昭和九年の書簡で、宗造の二代あとに社司

となつた那須多三郎のことを、

県社闘鶏神社の今の神職は、自宅が社に遠しとて一家大胆にも社務所（本社構内、神殿の直面）に住み、きたなき洗濯まで社内で行ない、夜は淫楽するなど神意に背き、と憤慨している。

ちなみに闘鶏神社は明治十四年四月県社となり、昭和二十一年独立の宗団となつた。宗造は、おとなしい松枝をどの娘よりも可愛がつていた。

松枝は小学校を卒業すると高等科に進み、さらに大阪の裁縫学校へ行く。病弱な彼女は花や裁縫を教えながら、「貧乏なる父」を助けた。

そんな松枝に縁談が起こつたのは、彼女が二十八歳になつてからである。

縁談を持ち込んだのは眼科・産婦人科医の喜多幅武三郎。喜多幅は熊楠と和歌山中学の同期で、父と早く死別したので独学で医師となつた。かたわら地方の象皮病の研究も行ない、磊落で人々に慕われていた。

「独身では不自由やろ」

喜多幅は、親友熊楠のために借家の世話をしただけでなく、嫁さがしを買つて出る。

喜多幅は松枝に白羽の矢を立てた。だが田村家では熊楠をよく知らぬ。信望ある喜多幅

の口ききなので宗造は縁談を承諾するが、婚約が整ってからは驚くことが続出した。

まず、松枝あてに四斗樽よとぐらいっぱい書籍が送り届けられた。

「ひまがあれば一冊でも多くの本を読みなさい」

熊楠の手紙が付されている。

そしてその数日後、山高帽にフロックコートの熊楠がステッキをついてあらわれ、

「松枝さん、権現松原を散歩しましょう」

と誘った。

権現松原は現在駐車場になっているが、田村家の人々は仰天ぎやうてんした。

山高帽にフロックコートという洋服姿だけでも珍しく、人目をひくのに松枝を散歩に誘

うとは……。

明治三十九年のことである。婚約したとはいえ、未婚の男女が肩をならべて散策する習慣は当時の日本にはなかった。ましてや小さな田舎町である。「どのような世間の誹そしり」を受けるかも知れぬ。

熊楠の思いがけぬ言動に驚きあきれ、心痛した宗造は、この地のしきたりや習慣を諄々じゆんと説き、熊楠に理解を求めた。

熊楠は、「始終怪訝な顔つき」で聞いていたが、やがて納得して丁重に非礼を詫び、帰っていく。

というのも熊楠にとっては、礼を尽くしたつもりだったからである。熊楠は二十一歳から三十四歳までの十三年間を欧米で暮らしている。勉学にはげむ生活であつたが、知らず知らずのうちにあちらの習慣が身についてしまつていた。

いや、フロックコート、山高帽のいでたちは熊楠にとつて一張羅いっちょやうろでもあり、最高の正装でもあつた。

熊楠に信頼され、彼の「側近第一号」と目された雑賀貞次郎さいがはその著『追憶の南方先生』のなかで、「先生が田辺に永住してから永眠するまで洋服——フロックコート——を着たのは昭和四年六月一日、天皇に御進講をした時だけだつた」と記している。が、これは雑賀の記憶違いである。

熊楠は田辺の三業地・新地に行くときも、フロックコートを着ている。しかしフロックコートを着るのは改まつた時か、めかす必要のある時？に限られた。

熊楠は、婚約者松枝を誘うために一張羅に身を固め、欧米のマナーに従つたと思われる。それゆえ宗造の話を「始終怪訝な顔つき」をしていたのであろう。

婚約者と散歩できなかった熊楠は、二、三日後に田村家に「灰猫」を持ち込む。

前回とは異なり、浴衣に角帯、片手に書物という熊楠は、もう片手に抱いていた猫を差し出した。

猫はまるまると肥え、小犬ほどもある。

「猫に行水をつかわせてください」

「行水？」

田村家の人々は目をみはった。いまだかつて猫の行水とはきいたことがない。

最近ではパートや専門店で猫のシャンプーを売っているが、むかしは猫は水を嫌うものとして、犬のように洗ったりはしなかった。

首をかしげる田村家の人々を前にして、未来の聳殿は大真面目である。

「おねがいます」

熊楠にうながされて、宗造の娘たちは総出で猫の行水にとりかかった。「テンヤワンの騒ぎ」で猫を洗い終える。よごれが落ちてみると、「なかなかハンサムな黒白のぶち猫」であつた。

「きれいになって、みちがえるようだ」

熊楠は「一方ならず」よろこび、毛繕いをする猫に目を細めた。

以来「猫の行水の申し出」はしばしばあり、猫は虎猫のときも、三毛猫のときもあつた。熊楠は猫の行水を申し出ること、松枝とすごせる一刻をつくる。

『南方随筆』『続南方随筆』の編纂に係つた中山太郎は、

南方氏は非常に猫を愛していた。素人下宿にクスぶつていたが猫だけは手放さず飼つていた。猫に食物を遣るのに肉でも飯でも、先ず氏が口中に入れて能く咀嚼し、栄養の含まれている汁は自分が嚥下し、残り滓だけを与えるという方法で、一人前の食物で猫と二人分を間に合わせるといふ新工夫のものであつた。

と書いているが、独身の熊楠は猫と暮らしていた。

しかし松枝をはじめ田村家の人々は知らぬ。

熊楠はこの頃素人下宿ではなく、中屋敷町中丁北端西角（三九番地）に住んでいた。

江戸時代、代々町の大年寄をつとめた旧家、多屋家の持家で、敷地四十五坪、建坪十五、六坪の平家である。

明治三十九年八月、錦城館で婚礼をすませた松枝は、この中屋敷町三九番地の家に入る。熊楠四十歳、松枝二十八歳であつた。

しかし、新居には先住者がいた。居間の座ぶとんを占領した彼女は、入ってきた松枝を「ウサンくさそうに」睨みつけた。

「おとなしい、しよし」

松枝は、先住者のぶち猫におそろおそろ声をかける。だが猫は松枝が彼女の座っている下の座ぶとんを引き抜こうとしたら、唸り声をあげた。

松枝は慌てて手を引っこめる。

婚約時代、熊楠の頼みで行水をさせたものの、松枝は猫が好きではなかった。魔性の生きものという気がして気味が悪い。

怯んだ松枝をみて、熊楠が手をのばした。

「チョボロクさん、何もお前の座ぶとんをとるとは言うてへん。お前が座ぶとんの山の上にいるから、あかんのや」

熊楠は、猫の乗った座ぶとんを持ちあげると、松枝にその下の座ぶとんを取るよう合図した。

「チョボロクさんと言うんですか」

「そうや」

チヨボロクさんの名前は、猫がかわつてもかわらず、南方家の代々の猫はこの名で呼ばれる。

動物の好きな熊楠は、猫の他にも十姉妹じゅうしまつ、鶯うぐいすを飼っており、のちにはカナリヤ、インコ、鯰なます、山椒魚さんしょうお、ごとひき（大蛙）、かじかと増えていく。

松枝の新婚生活は、しらみ退治からはじまった。ものぐさな熊楠はしらみをわかせていた。いや、家の内外を掃除しては叱られた。

「阿呆！」

数日前も、庭の落葉を掃き終わった松枝に夫の怒声が飛んできた。

「誰が落葉を片付けろと言うた！」

「あかんでしたか」

「落葉を掃きとつてしまつたら、せつかくついた菌がわやになる」

二十歳で渡米した熊楠は、在米中から地衣類、菌類の採集を行ない、現在もその調査・研究を続けている。

「すみませんでした」

「もとどおりにしとけ」